

をいふ時は忍び種なれど、猶忍ぶ草とよみて、さる心とも聞ゆべければ、いかゞあらん、古きよき本にしのびと書きてあるにや、後の本はたのみがたし、

〔圓珠庵雜記〕玄のぶ草をことなし草といふ、異名なり、後撰集つまに生ふることなし草をみるからにたのむ心ぞかつまさりける、新勅撰集、君みすてほどをふるやのひさしにはあふことなしの草ぞおひける、

〔伊勢物語下〕むかし男、後涼殿のはざまをわたりければ、あるやんごとなき人の、御つぼねより、忘草をしのぶ草とやいふとて、いだしせ給へりければ、給りて、

忘草おふる野邊とは見るらめど、こはしのぶなりのちもたのまん

〔大和物語下〕在中將うちにさぶらふに、みやすん所の御かたより、わすれ草をなん、これは何とかいふとて給へりければ、中將、

わすれ草生ふるのべとは見るらめど、こはしのぶなりのちもたのまんとなんありける、おなじ草をしのぶ草わすれ草といへば、それによりてなんよみたりける、

〔玉勝間五〕しのぶもぢずり

しのぶもぢずりといひし物は、古今集の河原左大臣の歌の、顯昭の注に、陸奥國の信夫郡にもぢずりとて、髪をみだしたるやうにすりたるをしのぶずりといふといひ、契沖が勢語臆斷にも、信夫郡よりむかし摺て出したる名物なりといへるがごとし、然るを師眞淵賀茂のいせ物語古意に、垣衣草シ、フグサの形を、紫の色もて摺たるをいふと見えたり、陸奥國に石二つある、其石にてすりたるよしいふは偽言なり、むかしのすり衣は家々にてこそすりたれとて、己が家々にてすりたりし證を出し、さて垣衣草の形の亂れたるをもて、おのが戀のみだれにたぐへたりといはれたるはいかにぞや、いせ物がたりの歌にては、さ聞ゆることも有べかめれど、そは次に古今集なる河原大